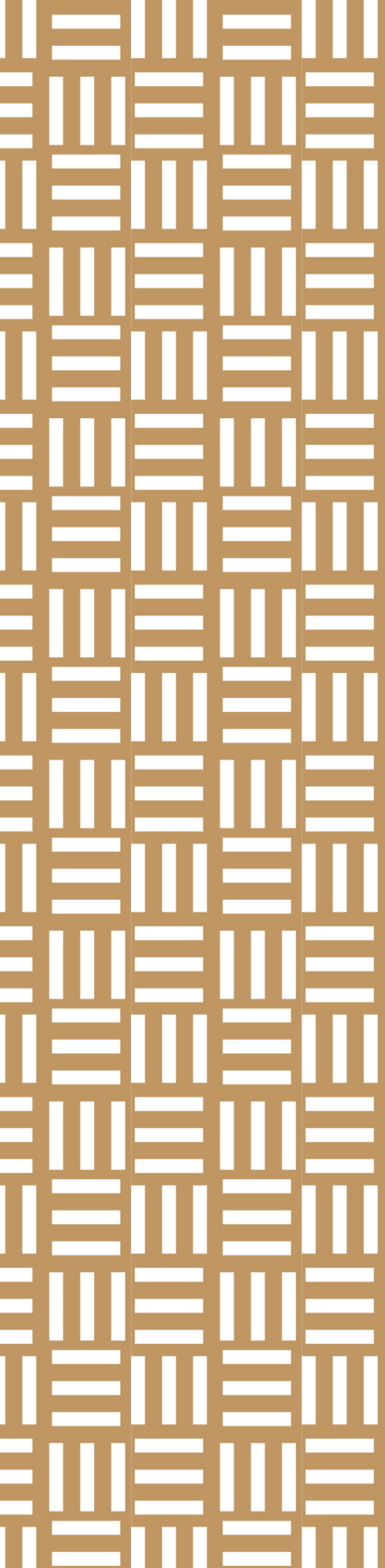


フルキヨキ

シンボル



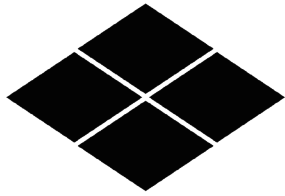
甲府の歴史や古い文化を感じることができるようなシンボルを、フルキヨキ（古き良き）シンボルとして紹介しています。普段あまり見かけることがなく、今だからこそ新鮮に感じるシンボルや、昔の人々の生活を思い起こさせるシンボルが新たな発見に繋がれば幸いです。

今回、文献の多くを峡陽文庫様と山梨デジタルアーカイブ（山梨県立図書館）様に許可をいただき使用させていただいております。峡陽文庫（<https://kaz794889.exblog.jp/>）さんは、山梨県に関わる歴史・地理について、貴重な史料とともにブログを書かれています。現在の街との対比や、素人が史料を見るだけでは読み解けない発見のある記事が満載です。

山梨デジタルアーカイブでは、山梨県立図書館・山梨県立博物館が所蔵する貴重な資料をデジタル化したものを、インターネットから無料で閲覧することができます。図書、国書、地図、甲州文庫などの貴重な資料に気軽にアクセスできるので、おすすめです。住んでいる地域の旧町名の地図など、歴史を身近に感じられる資料も沢山ありますよ。

<本項について>

- ・シンボル・画像等は、多くを各施設・団体・個人等のご協力によりお借りして掲載しています。
- ・許可の関係が難しく、掲載できるものが限られていましたが、ぜひ楽しんで、そして、見つけてみてください。
- ・本書内に掲載されているシンボル・画像・イラスト・文章・データ等の無断転載および無断転用をかく禁じます。
- ・シンボルおよび画像の著作権・所有権・商標登録における権利等は、所有者（または貸出主等）に帰属します。
- ・上記、著作権等の権利やその他本書に関するご不明な点におかれましては、コウフシンボル 500 制作委員会（メールアドレス:kofulifelab+ks500@gmail.com）へご連絡ください。



武田菱 (四つ菱・四つ割り菱)

江戸 明治 大正 昭和 平成

菱文様は紀元前より見られ、縄文時代前期の土器にも描かれている。菱形が連続した織文様から引用され家紋となっていたと思われる

武田菱の原型である菱紋は、一年草の水草であるヒシ科のヒシの実、またはヒシの葉を圖案化したものといわれる一方で、単純な図形のために創生は不明。菱紋は「菱紋」と「唐花菱紋」とに大別され、菱紋は基本となる「菱持(ひしもち)」を組み合わせた変形させる。

武田家の家紋に用いられているいわゆる武田菱は四つ菱、四つ割り菱と呼ばれ、その由来は前述の「楯無の鎧」に菱の紋が入っていたためとも言われる。宗家武田氏に関連した全国の武田氏や傍流の家系などでは「武田菱」に配慮したと思われる四つ菱以外の様々な菱紋が家紋として用いられている。

「武田菱」は武田氏が用いたことで知られ、同様の「割り菱(四つ割り菱)」と区別することがあるが、元は同じものである。菱形同士の間隔が狭くとられているものを「武田菱」として区別している。



YT



甲府徳川家の家紋 三つ葵

江戸 明治 大正 昭和 平成

日本の家紋「葵紋」の一種であり、葵の葉を3つ書いてあるのが特徴の家紋。甲府徳川家の家紋として用いられた。三つ葵は時代等により微細に文様に違いがある

外郭が黒い丸輪、その内部に3つの葵の葉が描かれており、葵の茎を模した部分が丸輪と一体化した形をとっている。

葵紋はフタバアオイを圖案化したもので、フタバアオイの通常の葉の数は2枚であり、3つの葉をもつフタバアオイは稀で、三つ葉葵は架空のものである。元来は葵祭で有名な賀茂氏によって用いられており、後に徳川家の家紋となる。甲府徳川家は江戸幕府3代将軍徳川家光の筋筋に由来し、それにより丸に三葵の家紋を用いた。甲府藩は2代藩主綱豊(徳川家宣)が徳川綱吉の世子となったことで、2代で絶家となる。

江戸幕府6代将軍徳川家宣は甲府藩の元藩主であり、甲府徳川家時代からの家臣である学者の新井白石や側用人の間部詮房らと共に政治を執り行った。新井白石は漢文の名手としても知られている。

NR



風林火山の旗

江戸 明治 大正 昭和 平成

武田神社

武田信玄の風林火山の旗。孫氏の文章から引用されたもので、武田信玄が快川詔喜に書かせたと伝えられる

武田信玄の旗についていたとされる風

林火山の文字は、孫氏が軍隊の進退について書いた文章を部分的に引用したものであり、原文は「故其疾如風、其徐如林、侵掠如火、難知如陰、不動如山、動如雷霆」。移動するときは風のように速く、陣容は林のように静かに、攻撃するのは火のように勢いに乗じて、どのような動きに出るか判らない雰囲気は陰のように、敵方の奇策、陽動戦術に惑わされず陣形を崩さないのは山のように、攻撃の発端は敵の想定外を突いて雷のように敵方を混乱させながら実行されるべきである」と言う意味である。難知如陰は其徐如林と、動如雷霆は侵掠如火と、意味が重複する部分が多いので旗印からは割愛されている。

信玄のライバルでもある上杉謙信の旗。毘沙門天の毘の字が書かれている。二人の間には「敵に塩を送る」などの数多くの逸話が残されている。



シンボル 所蔵：武田神社

NR



寛文元年甲府上組火消し着

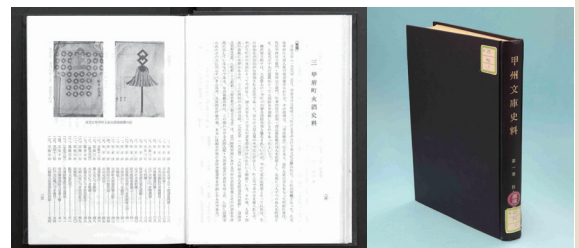
江戸 明治 大正 昭和 平成

江戸時代の火消し(今でいう消防士)の上着の圖案。火消し隊は各地区ごとに編成されていた

山梨県立図書館発行の「甲州文庫史料」

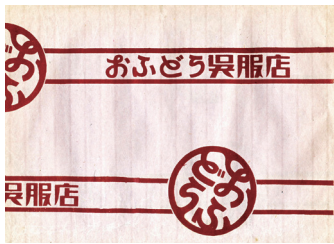
第1巻に掲載されており、デジタルアーカイブでもみることができる。江戸時代、寛文元年(西暦1661~1673年)は第4代将軍である徳川家綱の時代であった。当時は甲府も江戸と同様に火事が多く、甲府市中は延焼22町(約22ヘクタール)にも及ぶ大火に見舞われた。以降、火消し人の編成と体制強化等が行われた。

全8巻および「甲州文庫史料」は、昭和48年~55年にかけて、山梨県立図書館により甲州文庫の資料から編纂された。



シンボル・画像 出典所蔵：山梨県立図書館

YT



おふどう呉服店

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央2丁目(旧横近習町)

おふどう呉服店の屋号が載る包装紙。呉服商であった大木家が江戸時代・天保年間に五代目喜右衛門が「井筒屋」の屋号を「おふどう」に改称し使用していた

大木家は、江戸時代初期から約350年間の長きにわたって、甲府の町で呉服商を営んでいた豪商。甲府の文化にも大きく貢献したが、戦時中、昭和18年に廃業した。

江戸時代、第五代・大木喜右衛門の頃に豪商として甲府商人の頂点を極める。また、明治時代の第七代・大木喬命の時代には、織物工場や銀行を興して実業家としての名声を得た。同時に私学の振興や政界でも活躍して、山梨の商工業と文化の発展に寄与してきた。大木家には膨大な数の古書・美術品・工芸品・民俗資料等が遺されており、これらの資料群は九代目で最後の当主が亡くなった後、平成2年に山梨県に寄贈された。山梨県立博物館では「おふどうと名乗った家」という企画展が行われたことも。同名の展示図録も大変興味深い。

「おふどう」の屋号は、次のような由来が伝えられている。大木喜右衛門の時代に江戸に向かう修験僧に会い、恵みを与えると代わりに不動尊像をもらった。それ以来、慶事が続き大木家は隆盛となる。これに喜び屋号を「井筒屋」から「おふどう」に改めたという。



シンボル・画像 所蔵：峡陽文庫

YT

東映電気館



江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目5-4

昭和20年の空襲で焼失してしまった「甲府電気館」は同年に再建され、東映電気館となった

電気館は、かつて東京浅草にあった映画館。日本初の映画専門の劇場で明治末年、東京の浅草公園六区に設立され国産映画の専門館となった。これに倣って日本全国に多数の「電気館」が出来た。

甲府銀座ビルに入っていた甲府電気館は昭和20年に空襲で焼失してしまい、同年再建され東映電気館として再開した。昭和49年にダイエー(愛称:甲府ショッパーズプラザ)が入店。ダイエーは平成元年にトボス甲府店と改称し、その後、一時空きビルとなった後に、オギノかすがもーる店と市民交流拠点こうふアルジャンが設置された。平成21年に再び閉鎖されたビルは老朽化が進んでいたこともあり甲府銀座ビルとしての幕を閉じる。

平成30年「デュオヒルズ甲府」として店舗付マンションがその地を受け継いだ。

かつて東京浅草にあった電気館は日本初の映画専門の劇場で、明治末年、東京の浅草公園六区に設立され国産映画の専門館となった。これに倣って日本全国に多数の「電気館」ができればいい。



シンボル 所蔵：峡陽文庫

YT

オリオンパレス

江戸 明治 大正 昭和 平成

丸の内1丁目16-20

かつて甲府中心街にあった映画館。この跡地は現在「ココリ」となっている

昭和21年に洋画専門映画館としてオリオンパレスが開館した。オリオン通りの現在のアーケードは、大正15年(西暦1926年)に甲府電力(現在の東京電力)前から紅梅通りの間に南北に新道が開設されたのが始まりで、繁華街への近道として多くの利用があった。

昭和20年の甲府空襲でこのエリア一帯は、焼け野原となった。その後、貸店舗長屋が建てられ、復興の原動力として甲府駅と中心街を結ぶ重要な道となる。

オリオンパレスは戦後復興の中、北杜市出身の上村三兄弟により昭和21年から昭和32年まで営業が続けられていた。

現在のオリオン通り周辺には、上級公務員の官舎が多くあった。昭和23年に宿舎が移転し、商店街が誕生し、その一画に「オリオンパレス」があったことから、オリオン通りと呼ばれるようになった。



シンボル 所蔵：峡陽文庫

YT

甲府武蔵野シネマ・ファイブ

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央4丁目3-5

平成10年にオープンした新宿武蔵野館系列の映画館。県内初のシネマコンプレックスであったが平成23年に休館となった

休館となってしまった平成20年代は、近隣・近郊に次々とオープンしたショッピングモールに買い物客が流れ、街を周遊する人が減ってきていた時代でもある。車で来場する顧客向けのサービスとして鑑賞チケットの割引サービスやポイントサービスも行われていた。

甲府武蔵野シネマ・ファイブが開館する以前は、この場所には昭和29年に開館した「甲府武蔵野館」がロードショー館として営業していた。そのまた前身としては大正14年(西暦1925年)同じ場所で「中央館」の名で映画館があり、古くから大衆娯楽の地であった。

昭和20年代の「甲府武蔵野館」があった時代には、山梨県内だけで80館以上の映画館があったという。現在はワシントンホテルプラザの1FとしてDAIMARU甲府本店が営業している。



シンボル・画像 提供：cinema-st.com

YT



かいじ国体

江戸 明治 大正 昭和 平成

山梨県

かいじ国体のシンボルマーク。昭和61年に行われた第41回国民体育大会は、テーマをかいじ国体とし開催された

昭和61年に山梨県で開催された第41回国民体育大会。当時のパンフレット

によるとシンボルマークは「山梨の象徴である富士山を中心にして、ふれあいのお話を広げる山梨県民の心を表わし、下の2本の線はやすらぎのある甲斐路と躍動する県民のロマンを表現している。」と記載されている。右上に表示されている火のトーチのマークは国民体育大会のマークである。スローガンは「ふれあいの輪をひろげよう」であった。



当時、全国から多くのスポーツ選手が集まったこの大会は、甲府市誕生以来、もっとも大がかりなイベントであったという。

シンボル 提供：山梨県

シンボル 出典・所蔵：「第41回国民体育大会総合視察資料」(山梨県立図書館所蔵)
画像 出典：「写真集 甲府物語-市制100周年記念-」(山梨県立図書館所蔵)

E1



こうふ博'89

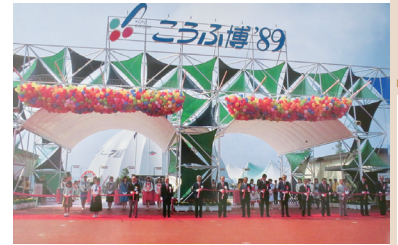
江戸 明治 大正 昭和 平成

小瀬スポーツ公園

こうふ博'89のシンボルマーク。平成元年、市制百周年を迎えた甲府市で9月15日～11月12日まで開催された地方博。テーマは「夢・心・きらめく未来」

デザイン意図には、「赤・ワインカラー・若草色の3つのだ円は、こうふ博のテーマである『夢・心・きらめく未来』をシンボライズし、名産ぶどう、宝石の街、そしてファッションの発信基地のイメージをもたせた。また、中央の青い流線は21世紀へ向けての甲府市の輝かしい未来への飛躍と、限りない発展への願いがこめられている。」と記されている。主たる企画として「2頭のジャイアントパンダ」、「リアモーターカーの実物大モックアップ」、「巨大水晶」が展示された。開催期間は2ヶ月弱であったが、動員目標50万人の予想入場者数を上回るなど興行としては成功をおさめている(総動員数55万5千人)。

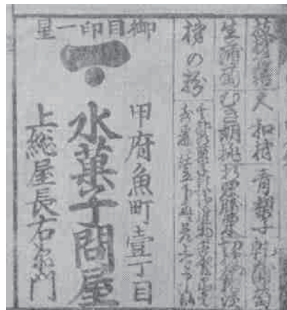
華やかなオープニングセレモニーの様子。この博覧会を記念して純銀製の小判が製作されており、現在もごくたまにインターネットオークションなどで取引されている。また山日YBSグループのブースでは実験段階であった3次元映像の公開が行われた。



シンボル 提供・出典：甲府市

画像 出典：「写真集 甲府物語-市制100周年記念-」(山梨県立図書館所蔵)

YT



水菓子問屋 上総屋長右衛門

江戸 明治 大正 昭和 平成

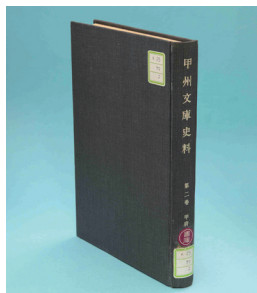
旧 魚町

山梨県立図書館所蔵の「甲州文庫史料」第2巻の「諸国道中商人鑑」に掲載されている水菓子問屋の屋号

「甲州文庫史料」は山梨県立図書館に

よって古い資料を編集し発行された書籍であり、第1巻～第8巻と目録という構成になっている。昭和48年(西暦1973年)に刊行されたこれらの文献は、様々な時代の歴史・文化・風習など当時を知る手掛かりとしての貴重な資料となっている。

この頃の水菓子とは果物のこと。つまり水菓子問屋は「くだもの卸屋」であったと思われる。水菓子問屋である上総屋長右衛門の店は、現在の魚町1丁目あたりにあったという記録が残されている。マークの上には「御目印一星」の文字。特選といった意味合いであろうか。



本資料「甲州文庫史料 第2巻」は「甲府町方編」とされている。
(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digi.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000016-YMNS0000073>)

シンボル・画像 出典：「甲州文庫史料 第2巻」(山梨県立図書館所蔵)

YT



御菓子屋 大黒屋本家

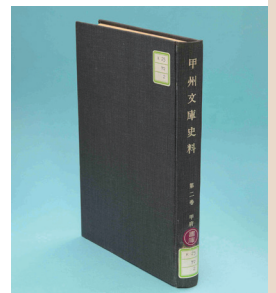
江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 魚町

山梨県立図書館所蔵の「甲州文庫史料」第2巻の「諸国道中商人鑑」に掲載されている御菓子屋「大黒屋本家」の屋号

「大黒屋本家」の看板には「お菓子製 甲府魚町三丁目」の文字。

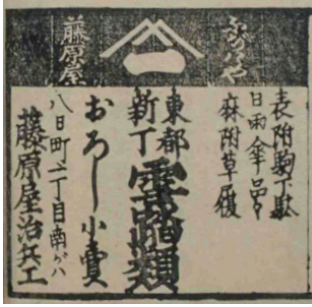
魚町は、現在の中央2丁目～5丁目付近にあり南北に魚町通りが伸びるエリア。屋号には「叶」かなうの文字、暖簾の左横に「開運」「福德前餅?」の文字が見えることから、縁起を意識した商品が名物であったのではないだろうか。どんな御菓子だったのか気になるところだ。



本資料「甲州文庫史料 第2巻」は「甲府町方編」とされている。
(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digi.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000016-YMNS0000073>)

シンボル・画像 出典：「甲州文庫史料 第2巻」(山梨県立図書館所蔵)

YT



雪駄類
藤原屋

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 八日町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」(こうふ かいもの ひとり あんない)に掲載されている屋号紋

「雪踏類」と屋号の下に大きく書かれているのは、現在でいう靴屋にあたる履物屋。雪駄は、雪踏とも書き、竹の皮の草履の裏に獣の皮をつけた履物。千利休が雪中で用いたのが始まりといわれている。後に、皮の上に金物を打ちつけた形状となる。「八日町一丁目南がハ」は八日町一丁目南側であり、現在の中央4丁目～5丁目に該当する当時の町の中心地である。

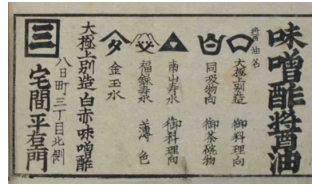
本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢竜軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。

(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digital.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)

YT



味噌・酢・醤油
宅間平右工門

江戸 明治 大正 昭和 平成

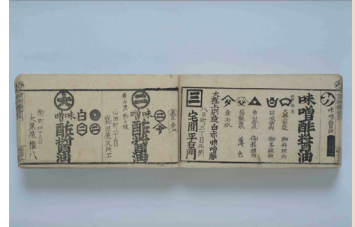
旧 八日町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」(こうふ かいもの ひとり あんない)に掲載されている屋号紋

屋号のマークは四角に漢数字の「三」が入るものと思われる。味噌・酢・醤油等の調味料問屋であったのだろう。日本各地の醤油を取り寄せ、販売していたと思われる。醤油名と書かれたその横には、現在でいう商品のロゴマークと商品名が書かれており、またその使用に關しての最適な調理方法も明記されている。店は八日町北側となっているところから現在の中央4丁目～5丁目の北側あたりと思われる。

本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢竜軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。

(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digital.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)

YT



荒物類
小倉屋

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 和田平町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」(こうふ かいもの ひとり あんない)に掲載されている屋号紋

荒物類とは、現在でいうところの家庭用の雑貨類を売る商売で、ざる・ほうき・縄・住宅小物などを取り扱っていたと思われる。住所は和田平町となっており、五丁下りと呼ばれていた旧金手町から旧城屋町までの旧甲州街道沿いを指すあたりであろう。現在の城東1～5丁目にあたる城東通りと呼ばれているこの通りは江戸時代の主要幹線道路だった。石和から城屋町を経て、和田平町となる。

本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢竜軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。

(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digital.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)

YT



扇子
蛭子屋

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 柳町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」(こうふ かいもの ひとり あんない)に掲載されている屋号紋

屋号のマークと思われる中に「拍榮堂」と書かれているところから、これが店名だったと推測される。扇子のマークの両脇に「和」と「唐」の文字が表記されているのは、当時の舶来品である唐物(中国製品)と国産のものごとを扱っていた専門店であろう。住所は柳町三丁目とあり、柳町は甲斐を代表する当時の豪商が集まっていたと言われている。現在の中央2丁目～4丁目付近と思われる。

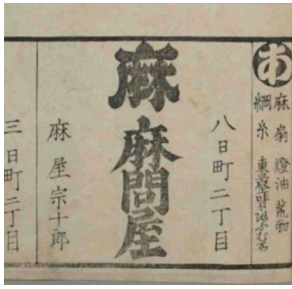
本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢竜軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。

(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digital.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)

YT



麻問屋
麻屋

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 八日町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」（こうふ かいもの ひとり あんない）に掲載されている屋号紋

屋号が「麻」の一文字で表現されている。珍しい屋号のマーク。麻問屋は一般的に神社神事の注連縄なども扱っていることが多い。八日町は毎月八日に市場が立ち、甲府で最も栄えていた町と伝えられている。また近隣に山八幡神社があることから、やはり神事の際の注連縄にも関わっていたのだろうか。

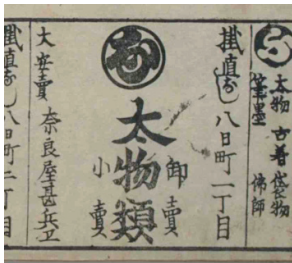
本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢竜軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。

(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digi.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)

YT



太物類
奈良屋

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 八日町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」（こうふ かいもの ひとり あんない）に掲載されている屋号紋

住所の上側に書かれている文字は、おそらく「掛値なし」であると思われる。これは、物を売るときに実際より高い値段をつけることがないという意味を表す。近い内容の「現金掛値なし」は現金取引で商売するというので江戸の呉服店三井越後屋(現在の三越)が始めた。どちらも、うそ偽りのないことを宣言する語句として知られている。太物類の太物とは、和服用の織物で使用される呼称の一つ。絹織物に対して、綿織物や麻織物を太物と称した。

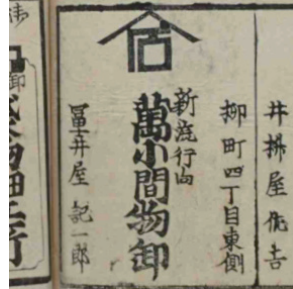
本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢竜軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。

(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digi.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)

DN



萬小間物卸
富士井屋

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 柳町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」（こうふ かいもの ひとり あんない）に掲載されている屋号紋

萬小間物卸(よろず こまもの おろし)に加えて新流行向の文字が書かれている。現在の百貨店やディスカウントストアといった業態に近く、日用品・雑貨・服飾雑貨等の商品を取り扱い、またいち早く新製品を店頭と並べていた総合商店であったのだろう。柳町四丁目は、当時の甲斐の豪商の集まる場所と言われており、現在の中央4丁目~5丁目付近と思われる。

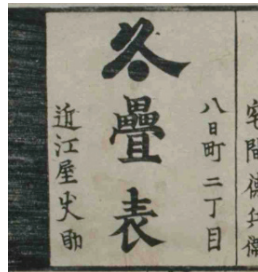
本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢竜軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。

(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digi.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)

YT



畳表
近江屋

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 八日町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」（こうふ かいもの ひとり あんない）に掲載されている屋号紋

畳表とは、畳の表面部分のゴザのことを指す。イグサを一本一本織り込んだもので、一枚の畳表を織るのに約4000本のイグサが使われる。イグサは主な生産地が九州、中国地方で中でも熊本県が主流だが、昔は広島、岡山でも盛んに栽培がおこなわれていたという。「近江屋」という名前は日本各地で広く店舗や事業の屋号として昔から使われている。

本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢竜軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。

(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digi.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)

YT



提灯所

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 豎近習町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」(こうふ かいもの ひとり あんない)に掲載されている屋号紋

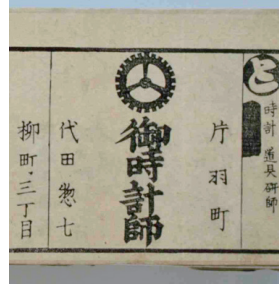
提灯(ちょうちん)は、伸縮自在な構造で細い割竹等でできた枠に紙を貼り、底に蝋燭を立てて光源とするもの。現在の懐中電灯やライトとしての役割をしていた。豎近習町(たつきんじゅまち)は現在の中央2丁目にある豎近習町通り由来する南北に渡る縦の道周辺と思われる。下府中23町の中で最も賑わいのあったとされる11町の一つ。近習とは主君の側に仕えた武士の事と言われている。

本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢竜軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。

(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digital.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)



御時計師

江戸 明治 大正 昭和 平成

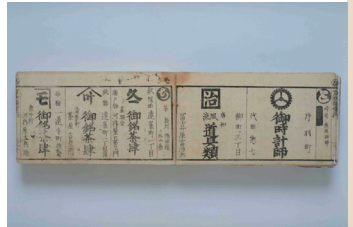
旧 片羽町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」(こうふ かいもの ひとり あんない)に掲載されている屋号紋

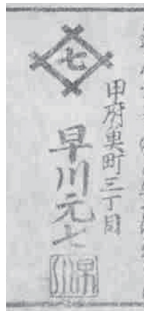
御時計師という名称は製造・販売・修理全般が出来た専門店だったのだろう。当時、時計は高級品であり、たいていは大名や豪商など富裕層が所持していた。本体や歯車をはじめとする機構は鉄または真鍮で作られ、美しい彫金の装飾が施されたものも多かった。また種類も多様であり、複雑な調整も特殊な技術が必要とされていたと推察する。片羽町は現在の相生1丁目～3丁目あたりで、昔「片場町」と呼ばれ、道の片方にしか街並みがなかったと言われている。柳沢吉保が甲府に於て統制し多彩に「場」から「羽」に変わったと伝わる。

本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢竜軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。

(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digital.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)



早川元七

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 魚町

山梨県立図書館所蔵の「甲州文庫史料 第2巻」の「諸国道中商人鑑」に掲載されている薬種屋の屋号紋

屋号紋は井桁紋で、漢数字の「七」が入る(井桁紋については「みのや」参照)。看板には「諸国妙薬取次所」とあり、妙薬とは「不思議なほどよく効く薬」を表わす。また「諸薬調合仕候(しやくちょうごうつかまつりそうろう)」は現在の総合調剤薬局といったところか。当時は薬(生薬・漢方等)が非常に高価な時代であり、文中の筆書きにあるように「諸国にて数々の薬を集め〜」からは、相当な知見と財力を有する豪商であったと覗える。魚町は現在の中央二丁目から五丁目にあたる南北通り(魚町通り)沿いの町人地で、魚介類や乾物を扱う商人が集住したことに由来する。

本資料「甲州文庫史料 第2巻」は、山梨県立図書館が編集・出版した全八巻によって構成される「甲州文庫史料」の2巻目であり「甲府町方編」とされている。

「甲州文庫史料」は甲斐国(山梨県)に関する史料の収集を行っていた功刀亀内氏が、その膨大な史料を昭和26年に山梨県へ寄贈したことを受けて、編集・発行された。史料の整理に20年近くを要した後、昭和48年から昭和55年にかけて「甲州文庫史料」全8巻が刊行された。(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digital.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000016-YMNS0000073>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)



雛人形問屋 みのや

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 八日町

山梨県立図書館所蔵の「甲州文庫史料 第2巻」の「諸国道中商人鑑」に掲載されている雛人形問屋の屋号紋

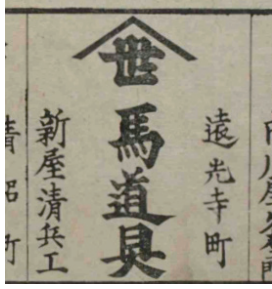
暖簾に描かれている屋号紋は、井桁の中に漢数字の「三」。井桁紋は、井戸の地上に出た部分に乗せる井の字型に木組みした枠を具象化しており、現在でも広く使われている。漢数字の「三」は、「みのや」(美濃屋)を表すものと思われる。当時の商業中心地である八日町は「府中一の良き処」と言われ、八日町通り=甲州街道は、江戸中期の甲府において最も栄えた場所だった。

本資料「甲州文庫史料 第2巻」は、山梨県立図書館が編集・出版した全八巻によって構成される「甲州文庫史料」の2巻目であり「甲府町方編」とされている。

「甲州文庫史料」は甲斐国(山梨県)に関する史料の収集を行っていた功刀亀内氏が、その膨大な史料を昭和26年に山梨県へ寄贈したことを受けて、編集・発行された。史料の整理に20年近くを要した後、昭和48年から昭和55年にかけて「甲州文庫史料」全8巻が刊行された。(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digital.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=0000000016-YMNS0000073>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)



馬道具 新屋

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 遠光寺町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」(こうふ かいもの ひとり あんない)に掲載されている屋号紋

屋号紋は山印に漢字の「世」が書かれている。山印の意味は「商売によって家が発展し、その絶頂をきわめたい」という願いが込められているという。ならば漢字の「世」は世の中の為、人の為という願いが込められているのかと想像してしまう。

当時、交通・運輸の手段としての馬は欠かせないものであり、現代の自動車・トラックといったイメージであろう。扱ひ物の「馬道具」は、馬に乗るための数々の馬具を扱っていたと思われる。馬に乗るためには、馬を制御する轡(くつわ)と手綱(たづな)、馬の背中にまたがるための鞍橋(くらぼね)、馬上で足を安定させる力革(ちからがわ)と鐙(あぶみ)等、様々な道具が必要とされていた。店のあった遠光寺町は、現在の遠光寺周辺の伊勢二丁目あたりと思われる。

本資料「甲府買物独案内」は嘉永7年(西暦1854年)、著者：勢亀軒茶翁、出版者：藤屋伝右衛門(ふじやでんえもん)にて発行されている。(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digi.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=000000021-YMNS0121739>)



シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)



萬塗物 和泉屋

江戸 明治 大正 昭和 平成

旧 柳町

山梨デジタルアーカイブの「甲府買物独案内」(こうふ かいもの ひとり あんない)に掲載されている屋号紋

屋号紋は四角囲い「カク」の中に漢字の「泉」が入る。「カク」は固く真面目さを表わす印として用いられていたという。勤勉実直な正直商売をモットーにしていたのであろう。萬塗物(よろずぬりもの)とは漆塗りの器(漆器)の総称であり、「御婚礼御道具類」や「雛小道具類」の表記から読み取ると、現代の「ハレの道具」を扱い「神楽宮祭礼道具」も含めて、非日常の儀礼儀式に欠かせない道具を提供していたのであろう。また縫箔(ぬいはく)とは、刺繍(ししゅう)と金銀の箔で模様を表わしたキモノ形の能装束のことで、主に若い女性を主人公とする鬘能(かつらのう)において、長絹(ちょうけん)や舞衣(まいぎぬ)といった上衣の下に腰巻にして着用していたものだという。これもまた高価で貴重な服飾品であり、当時の甲府における隆盛さが伺える。

引用資料「甲府買物独案内」
(山梨デジタルアーカイブリンク：<http://digi.lib.pref.yamanashi.jp/da/detail?tilcod=000000021-YMNS0121739>)



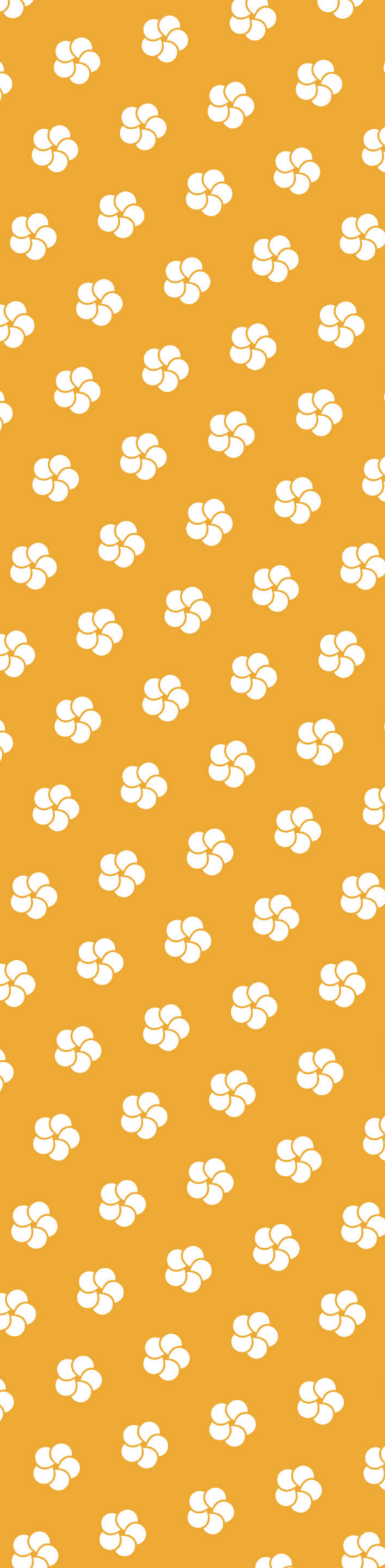
シンボル・画像 出典：山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館)



シヨウギヨウ

エリアノ

シンボル



工業団地・商業施設・商店街・温泉街などを幅広くショウギョウエリア（商業エリア）のシンボルとして紹介しています。

たまには、ひとつのお店を目指すのではなく、商業エリアを散歩してみるのはいかがでしょうか。新たな発見があるかもしれません。甲府中心街にたくさんある、路地横丁巡りもおすすめです。

<本項について>

- ・シンボル・画像等は、多くを各公共施設・商業施設・商業エリア等のご協力によりお借りして掲載しています。
- ・本書内に掲載されているシンボル・画像・イラスト・文章・データ等の無断転載および無断転用をかたく禁じます。
- ・シンボルおよび画像の著作権・所有権・商標登録における権利等は、所有者（または貸出主等）に帰属します。
- ・上記、著作権等の権利やその他本書に関するご不明な点におかれましては、コウフシンボル 500 制作委員会（メールアドレス：kofulifelab+ks500@gmail.com）へご連絡ください。



アリア・ディ・フィレンツェ

江戸 明治 大正 昭和 平成

川田町アリア

アリア・ディ・フィレンツェは、イタリア語で「フィレンツェの空気」を意味し、山梨県が推進するファッション都市構想から生まれた協同組合ファッションシティ甲府が運営する工業団地

昭和62年に甲府商工会議所がファッション関連の地場産業を集積し、異業種間の交流を図るための団地創設を発売したこと始まり、平成6年に完成した。北川原温が設計。多くの植物が配置され、電柱のない地下埋設設備を採用するなど工夫が凝らされたこの施設は、山梨ファッション市民大賞やグッドデザイン賞などを受賞し、平成8年には皇太子ご夫妻(現在の天皇后両陛下)のご訪問、平成12年には石原都知事(当時)の視察も行われた。

広大な敷地内には中庭や憩いのスペースなどもあり、地場産業を中心とした12企業の本社・工場などの建物がある。常設の商品展示室をもつ企業があるなど、普段から一般見学可能な場所も。



EI

グランパーク

江戸 明治 大正 昭和 平成

国母5丁目8-1

平成9年から平成26年まで存在した商業施設。通称グランパ

緑・赤・青でつくられたロゴマーク。赤いAの書体だけが他の文字と違うところ作者の何らかの思い入れがありそうだが、今はもう知る術がないのが残念である。

グランパークはオープン当時夢のようなショッピングセンターで、連日たくさんの人で賑わっていた。最盛期には映画館やボウリング場・ゲームセンターなどのアミューズメント施設が多数揃う複合施設となり、甲府のランドマーク的な存在となった。

一時代を築いたグランパークだが、国道20号沿いにイトーヨーカドーなどの郊外型店舗ができはじめると徐々に衰退。

平成26年3月末にその幕を閉じた。

甲府南地区第一種市街地再開発事業として建てられたグランパーク。クリスマスシーズンには外壁にクリスマスツリーのイルミネーションが飾られた。



画像 出典 : wikipedia/Mr.W, GFDL-no-disclaimers, <https://ja.wikipedia.org/w/index.php?curid=887090>

SK

エクラン

江戸 明治 大正 昭和 平成

丸の内1丁目1-8

甲府駅に直結する商業施設。昭和60年から平成27年3月初旬までの名称のロゴマーク。現在の名称は「セレオ甲府」

ショッピングピンクのロゴマーク。Aの文字のみ小洒落たデザイン。改装し「セレオ甲府」に変わった現在でも「エクラン」と呼ぶ人がいるほどに、当時はまさに甲府のシンボルマークだった。

昭和61年開催のかいじ国体にあわせ、それまで木造平屋建てだった甲府駅舎を橋上化する工事が行われ、その際商業施設の入る駅ビルとして昭和60年10月に「エクラン」の名称で開業。山梨初出店のショップや飲食店もあり、「やっと甲府にも駅ビルができた!」と多くの人で賑わっていた。

現在の駅ビル「セレオ甲府」のロゴマーク。JR東京西駅ビル開発が運営する八王子・国分寺の駅ビルとブランド名を統一するため、平成27年3月に「セレオ甲府」と改めた。屋上からは晴天時には富士山を見ることができる。



SK

ココリ

江戸 明治 大正 昭和 平成

丸の内1丁目16-20

マンション、山梨県立宝石美術専門学校、居住者用駐車場、一般用駐車場、商業施設からなる高層複合商業ビル「ココリ」のロゴマーク

甲府の中心街にランドマークとしてそびえ立つココリ(KoKori)。ココリの名称は、山梨県在住者を対象にした公募によるもので、応募総数479点の中から同再開発組合の選考によって選ばれた。ココリの名の由来は、甲府の「コ」、再開発地区の旧町名である紅梅の「コ」、同地にあるショッピングアーケード街のオリオン通りの「リ」の、3つの地名を元にした造語であり、甲府市在住の歯科医師により考案された。ロゴマークのデザインはコ・コリの名の由来に基づき、それぞれの文字のイメージカラー、緑豊かな甲府の緑色、紅梅の紅色、オリオンスクエアの青色をドットのデザインで表現した。

同地はココリができる前、県内大手スーパーマーケットを展開するオキノのオリオン店と本社であったが、平成3年に改修してファッションモール『パセオ』として運営していた。さらにその前は、映画館「オリオンパレス」があった場所である。

2階には千客万来、商売繁盛、病除けのパワーを持つ「招き信ニャン」が。



SK



KOFU FOOD VILLAGE

甲府ぐるめ横丁

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目6-4

平成27年に中心街にありながらテナントが激減していた芳野ビルを、人と人がつながる山梨の食文化村として改装、熱き想いの飲食店が集まり山梨を盛り上げている

甲府ぐるめ横丁のある芳野ビルは、昭和40・50年代には、スナックや飲食店が48店舗も軒を連ねた甲府歓楽街を代表するビルの一つであった。しかし、時代の変化に徐々に活気を失い近年では5店舗のスナックに支えられてきた。改装を機に甲府ぐるめ横丁に名前を改め、昭和レトロ感を残しつつ、屋台村システムを取り入れ、個性的な飲食店が集まり、山梨の食文化発信の場、交流の場として活気を取り戻している。また2階は、スナック横丁として新たなスナックも出店し賑わいをみせている。甲府ビジネスラボというシェアオフィスもあり起業家の情報交換の場になったり、山梨県活性化プロジェクトが開催されたりと甲府の街で活躍する人を増やしている。

各店舗のほか、山梨の食文化や、ピザ、中華料理等、様々なお店から好きな物を頼んで食べられるスペースも。



AT

HIKARI TO KAZE MARKET COURT

光と風マーケットコート

江戸 明治 大正 昭和 平成

横根町480-1

シンプルかつ洗練されたロゴマーク。施設全体の基本構想やネーミングなども手掛けた「株式会社生活スタイル研究所」がデザイン

日本のロゴ&マーク集 vol.5 (alpha books)にも掲載されたロゴマーク。

家のようなモチーフは“暮らし”を表現している。また、MARKET COURTの“COURT”は中庭を意味し、物を買うだけではなく「外の空間で自然とのつながりを感じながらくつろいでもらいたい」という想いが込められている。

「光と風マーケットコート」は住宅設計・施工を手がける「光と風の設計社」が日常を癒す”をコンセプトにつくったビレッジ型の複合施設。ショールーム機能を中心として、ライフスタイル雑貨店・カフェ・ペーカリー・ビューティーサロン・グリーンショップ等から構成されている。

一歩足を踏み入れると、光と風を感じるような心地いい雰囲気にもまれる。定期的にイベントを行い、周辺に住んでいる人の交流の場にもなっている。



SH

岡島百貨店



江戸 明治 大正 昭和 平成

丸の内1丁目21-15

江戸時代の屋号紋が用いられたロゴマーク。現在山梨県内においては唯一の百貨店。県内においてそのブランド力と認知度を維持している

その歴史は深く天保14年(西暦1843年)現在の中央2丁目に岡島定右衛門が茶商の大黒屋として創業。後に、呉服店および両替商として営業も開始した。昭和11年に株式会社岡島に改組し、昭和13年9月に県内では2番目となる百貨店として現在地に岡島百貨店として地上5階の大型店舗による百貨店形式の営業を開始した。甲府空襲で内部は焼けたものの外部は残り、ほどなくして営業を再開している。

過去には八王子市の八王子岡島、茅野市に茅野岡島を営業していたが、八王子岡島は昭和45年、茅野岡島は平成13年に閉店し、現在百貨店事業を行っている店舗は本店のみである。他に山梨県内においては唯一の日本百貨店協会加盟の百貨店である。

多くの甲府市民に愛されている百貨店。品揃えも豊富で、ハイブランドなものを各種扱っている。百貨店事業以外にカインズホームやケースデューキのフランチャイズ事業なども行い郊外型の店舗展開も行っている。



YS



かすがもーる

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

甲府中央商店街の繁華街に相当し、戦前から百貨店や専門店が多く存在する地域

岡島百貨店と山梨中央銀行本店の南側を起点に甲府銀座ビルまでの南北100mにわたり伸びる商店街。元々は春日町商店街であったが昭和62年に整備され、現在の名前に改称された。車の通り抜けが可能であるほか、歩道部分はアーケードで覆われている。同年、手づくり郷土賞を受賞。通りには、昔からの洋品店や居酒屋、ヴァンフォーレ甲府のオフィシャルショップなどがある。以前は映画館も存在し、現在その場所は大型のイベントスペースとしてディスコイベントなどが行われ盛り上がっている。

交差点を挟んでオリオン通りへと続いている「かすがもーる(春日通り)」は、近年新しく店も増えてきており、中心街活性化の一役を担っている。



YT



エル西銀座

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

甲府中央商店街の繁華街に相当し、戦前から百貨店や専門店が多く存在する地域

商店街の愛称・エル西銀座の「エル」

は「Large(大きい)」、「Love(愛)」、「Life(人生)」の頭文字から取った。昭和62年、エル西銀座の道路改修工事に伴い、魅力ある商店街にしようと周辺の店主や住人の方たちが設置した十二支の像がある。「子どもから大人まで幅広い世代に親しみのあるものを」という理由から、十二支の像が選ばれた。銅像はただ動物を形作っているだけでなく、それぞれに趣向が凝らされており、銅像の台座にはその動物にまつわる豆知識やミニクイズなども書かれている。また、毎年その年の干支には、正月飾りが飾り付けられるという。



十二支の銅像は約100mの道路沿いに12体あり、そのうち東西にある4体はやや高いところに飾られている。写真のヒツジのほかにも特徴的な像が、道行く人を楽しませてくれる。

YT



春日あべにゆう

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

かすがもーの南側にある南北100mの商店街。かすがもーの同様、歩道部分はアーケードで覆われている

かすがもーの南側にある春日あべに

ゆうは、エル西銀座辺りから始まり、かすがもーと直線上にありながらも、かすがもーに比べ、ぐっと歓楽街の色が濃くなる。日中は人通りもまばらだが、夜になると色っぽい明かりが灯る。

春日横丁を始め開発通りやオリンピック通りなど、実に6本もの路地が接する通りともなっており、ディープな路地への入り口のな路地でもある。

また、平行して存在する「裏春日通り」も存在する。



歓楽街としての要素が強い通りではあるが、実はローカルCMで有名な眼鏡店や老舗の薬局などもあり、街の温かさが残っている通りでもある。

YT



ベルメ桜町通り

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目・4丁目

中央商店街の南東側にある通り。桜通りに属するが銀座通りを境に南側がベルメ桜町、北側はコリドー通りとなる

ベルメ桜町通りは、古くは松林軒デパート(または松菱デパート)といった大型

商業施設の老舗があり。現在でも、豆店や饅店、花屋などの老舗の趣も残る。また、前述のデパート跡地にはビジネスホテルが建ち、県外からの出張者も訪れる。

桜通り北側のコリドー通り(コリド桜町)には、地元では貴重な芸術のランドマークともいえる「桜座」や、老舗の洋菓子店、スポーツ洋品店、地ビール工房とそのレストランなどが近年も活気を与えている。



ベルメ桜町とコリドー通りは、いずれも歩道部分がアーケードに覆われているが、車道部の道幅が狭く南側から北側への一方通行となっている。

YT



弁天通り

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

かすがもーの東側にある通り。銀座通りを境に南側に進むと春桜会通りへとつながっている

岡島百貨店の向かいから南側へ続く

弁天通りは、小規模な店舗が多く、小料理店やスナック、日本料理の店などが軒を連ねる。春桜会通り・裏春日通りへとディープな歓楽街に続く通りだが、銀座通りまでのこの区間は、明るく初心者でも歩きやすい道でもある。

弁天通りには言わずと知れた甲府の老舗名店、おでん辰巳やスコット、てっばん秀、おふくろ、大衆酒場熊鯨などもあり心まで温まるグルメスポットとなっている。



歩道と車道の分離はされておらず、車は北側から南側へ一方通行。バス停からも近く、コインパーキングも充実しているので歩いてみるのをオススメする。

YT



甲府銀座通り商店街

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央

銀座通りに設置されているタイル。甲府銀座ビルから東側にある遊亀通りまで、東西200mにわたり伸びる商店街。全体をアーチ状のアーケードに覆われており、車の通行は不可となっている

市街地における繁華街中心地の通称として定着している「銀座」を冠した「甲府銀座」の始まりは、昭和5年頃といわれている。地元からの寄附で興され、

その後、甲府市が予算を確保し春日通りから桜通りを経て柳町通りに通ずる東西の道(約160m)を舗装化した。老舗店も数ある通りだが、一時は衰退し「シャッター商店街」的な印象もあった(特に昼・夜営業店舗混在のため余計にそう見える)。現在は年間を通じて様々な取り組みが行われ、藍染め布約200枚でアーケードを飾る現代アートやワークショップを手掛ける「歩帆舎」のプロジェクトや、七夕飾りなどが行われたり、夏祭りやビアガーデンなどのイベントが開催されている。

甲府銀座通りは、春日通り、銀座仲町、桜通りといった主要繁華街と直角に交わる中心的存在。

毎年2月3日に行われる大神宮祭では、アーケード中が屋上で盛り上がる。

また、毎月第2土曜日に行われる第2土曜日もぜひ訪れていただきたい。



YT

ファンシーロード8番街

江戸 明治 大正 昭和 平成

丸の内1丁目

平和通りの東側、甲府駅付近～平和歩道橋～スクランブル交差点の歩道上にかつてあったアーケード

ファンシーロード8番街は、昭和50年頃

甲府駅前の平和通り沿い東側に設置された。名前の由来は、丸の内1丁目8番地にかかるアーケードから命名されたという。

その後、駅南口の大規模な再開発に伴い2014年に撤去された。ファンシーロード8番街のあった平和通りは、1994年に読売新聞社選定の「新・日本街路樹100景」のひとつに選定されている。

平和通りという名前の由来は、甲府空襲からの復興を願ったものであり、計画当初は広路1号線(ひろじいちごうせん)の名前で幅員50mの道路として整備する予定であったが、規模が縮小され、現在の36mに落ち着いた。



YT

朝日通り商店街

江戸 明治 大正 昭和 平成

朝日

甲府駅北口から徒歩約7分、南北に約400m伸びる朝日通り沿いの老舗商店街。新旧様々な業種の約100件の専門店がある

商店街の沿道には、約90本のハナミズキが植えられ、白やピンクの花で色

づく頃にはハナミズキ祭りが開かれる。その他にも、夏祭りやえびす講祭りなどのイベントも行われている。ズッキーちゃんというマスコットキャラクターがいる。日用品から医院などの庶民的な商店街で、老舗の3・4代目の店主がいるお店から、新しいお店もあり、落ち着いたシックな商店街として地域に愛されている。THE BOOMの「星のラブレター」の歌詞にも出てくる。

春に華やかな花を咲かせるハナミズキは商店街のシンボルとなっている。商店街のオリジナル商品も開発しており酵母パンや、ハナミズキ酵母ワインCORNOUILLER(コルヌイエ=フランス語で「ハナミズキ」を意味)を販売している。冬のイルミネーションも必見。



AT

オリンピック通り

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

春日アベニュー側に掲げられたオリンピック通りの看板。昭和にかけられたもの。アルファベットの綴りが誤っているのはご愛嬌

オリンピック通りは中心街南部で春日通りと裏春日の間にあるT字形の路地

横丁で、前回の東京オリンピックが開催された昭和39年に開通したことが名前の由来。北にある開発通りと繋がる南北の路地は表通りから見えない隠れ家的な空間になっている。完成してから55年間、様々な店が開いては閉じ、また別の店が開くといった流れを繰り返してきたが、その中には開通当時からずっと続いているという老舗の名店もある。また、新しいお店が開く際に「オリンピック通りだから、ギリシャ風に…」と突然壁や通路が真っ白に塗られた空間が現れるなど、すごく混沌としている所がまた面白い。年季の入った設備や閉ざされたシャッター、閉店後も放置されたままの看板からディープな横丁感があふれ出す中で多くの人気店が元気に営業している。

55周年記念誌『オリンピック通り物語』。やまぶき2号店の宮坂さんを代表として編集された。昭和からの歴史を振り返り、新たに令和の時代を歩んでゆく決意のにじみ出る、魂の籠もった一冊。表紙を飾るのは開通当時のオリンピック通りのマドンナ。ちなみに、今もなお守護神の様に現役で活躍している。



DS



オリオン通り

江戸 明治 大正 昭和 平成

丸の内1丁目

オリオン通りに敷かれたタイル。東京電力山梨総支社から岡島百貨店と山梨中央銀行本店の間まで南北約100メートルにわたり伸びる商店街

オリオン通り周辺は、かつて官僚などの上級公務員の官舎街だった。大正15年(西暦1926年)に南北に延びる道路が整備され、繁華街への近道として人々に多く利用されるようになった。昭和20年の甲府大空襲では、この辺りも焼け野原になったが、ここに建てられた貸店舗長屋が復興への原動力となり、甲府駅と中心街を結ぶ主要な道路となった。通りの名前の由来となったオリオンパレスは、昭和32年に廃業となったが、「オリオン」の名は現在もこの地に残る。

昭和23年、通り沿いにあった検事正宿舎が移転し、通りの両側に店舗が造作され商店街が誕生した。その一画に「オリオンパレス」という映画館があったことから「オリオン通り」と呼ばれるようになった。



YT



オリオンイースト

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

オリオン通りの東側に平行している商店街。レンガ調の建物で統一された景観はヨーロッパの小径を想わせる

紅梅北通りと紅梅通りの間、南北に位置するオリオンイーストは、全長約40mの空間に様々な店舗が立ち並ぶ。

アパレルや宝飾雑貨・アクセサリーといったファッション系の店舗に加え、パスタ、ラーメン、居酒屋、バーなどの数々の飲食店が混ざり合うワンダーランド。近年では、コワーキングスペースも登場して、遊びと仕事と生活に新しいスタイルを提供している。

毎年10月下旬のハロウィン前から、翌年1月中旬あたりまでは通り全体がライトアップされる。眩しいほどの3万個以上のイルミネーションが輝き、道行く人々を楽しませてくれる。



YT



浅草飲食店街

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

岡島百貨店前から、かすがも～を南に向かい、東側につながる路地型の繁華街。向かい側は甲府ぐるめ横丁

浅草飲食店街は、途中が鍵曲がりになっているので行き止まりのように見えるが、かすがも～(春日通り)から弁天通りまで繋がっている。まさに路地といった風情と、おしゃれな大人の雰囲気が入り混じるカオスな小道の両側には、バー、スナック、パブ、レストランなど約30件が立ち並び、はしご酒にもうってつけである。近年開催されている「甲府はしご酒ウィーク」にも数々の店舗が参加している。

「浅草」の名は昭和の当時、浅草が最先端(ハイカラ)な街だったことにあやかったのだろうか。スナックやジャズバーに加え、カウンターでフレンチが楽しめるグルメなお店までであるというから奥が深い。



YT



開発通り

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

春日アベニュー側に掲げられた看板。平成27年「オリンピック通り北」などと仮称で呼ばれていることを知った大家さんが、由緒ある名前を残すべく急遽設置したという

春日通りと裏春日の間、オリンピック通りの北に位置する路地横丁。長らく看板が掲げられていなかったため、一時は通りの名前は忘れ去られ、中でオリンピック通りの北口と繋がっていることもあって「オリンピック通り北」などと仮称で呼ばれることもあったが、ある日突然「開発通り」の看板が掲げられた。その昔、この界隈に「開発温泉」という名の温泉が湧いていたことが通りの名前の由来だという。通りの北側を入口にしている店舗がないため店の数は少なく見えるが、南側にはオリンピック通り以外にも建物内部へ引き込む通路が2ヶ所あり、小さなBARやスナックが所狭しとひしめいている。

看板の裏には「またこうしきおつけてかえれし!」の文字。手書きの甲州弁が温かい。開発通りの中にある「Bar Mikonos」はギリシャのミコノス島が由来、奥の扉はオリンピック通り側とも繋がっていて「ぎり舎」の北側入口と迷路感満載。



DS



たき通り

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

「かすがあべにゅう」の東側に数ある横丁型繁華街の一つ。このエリアで一番南に位置している

たき通りをかすがあべにゅう側入り口

を進むと、途中から逆コの字型に展開されている「ニュー銀座街」につながり、「裏春日通り」へと続く。シンボルの画像はニュー銀座街側の看板。看板に配線がかかっている様子も横丁なら当たり前のように感じられる。

「かすがあべにゅう」を西側の南北道路、「裏春日通り」を東側の南北道路としたエリアには、東西に貫く横丁型繁華街が多数存在している。地図で見るとまさにハシゴの形になっている。まさに露路地裏でハシゴ酒が楽しめるエリア。香港の九龍城なき今、ぜひこのエリアは残し続けたいと思う筆者である。”



入り口には親切にMAPが設置されている。お店は2Fにも。横丁群の最南端エリアはかなりディープな店も多い。

YT



甲府駅前ちようちん横丁

江戸 明治 大正 昭和 平成

丸の内2丁目

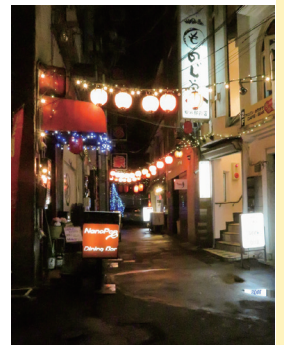
甲府駅前ちようちん横丁加盟店各店に掲げられた看板。右側には「地元が頑張る!!」と書かれている

甲府駅前ちようちん横丁は、元は「甲府

駅前銀座南通り」の通称と呼ばれ、一本北にあった「甲府駅前銀座北通り」と共に親しまれ、賑わっていた。しかし、中心街が衰退していく中で「北通り」は片側の建物が解体されて横丁の体をなさなくなり、「南通り」からも客足が遠のいていった。

そこで11年前に有志が集まり、新たに旗揚げされたのが「甲府駅前ちようちん横丁」である。加盟店で協力して様々なイベントを企画するなど、現在、甲府中心市街地でトップクラスに団結力の強い、熱く盛り上がる路地横丁だ。

その名の通り、横丁には多くのはちようちんが飾られており、夜になると赤いちようちんの温かな光が訪れる人を優しく迎えてくれる。地元の人はもちろん、駅に近いこともあり出張者にも人気のエリアとなっている。



DS



錦通り

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

錦通りは1本の通りではなく、十字に広がっている。老舗と新しい飲食店が立ち並び、中央エリア初心者にもやさしいエリア

春日も一から舞鶴通りへ抜ける東西

約100mほどの通りと、エル西銀座から

城東通りへ抜ける南北150mほどの通りが十字に交わる商店街。

古名屋ホテルや甲府ぐるめ横丁(芳野ビル)、デュオヒルズ(マンション)などの裏通りの印象もあるが、老舗の飲食店や甲府中心の飲食店を支えるフレッシュマート中沢もあり、また近年では新しくコンテナハウスのおしゃれな飲食店やカフェなども出来てきている。十字路が交差する付近にはシアターセントラル Be館(映画館)もあるので普段と違った休日

を錦通りで過ごしてみるのはいかがだろう。



うなぎ料理黒駒、やきとり小磯課長、甲州車屋、ビストロフレンチボンマルシェ、レストランバーSAIKI、老舗バー馬酔木、魚屋ちから、博多白湯おでん湯ろや などなど、ここにしかない人気店が数多くある錦通り。

EI



ニュー銀座街

江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

裏春日沿いに掲げられたニュー銀座街の看板

ニュー銀座街は春日通りと裏春日間を

通る最南端の路地横丁で、裏春日側の入口から並行する2本の通路が奥で繋がっていて、小さな区画を沢山備えている。1階は居酒屋やスナックが連なり歌声の聞こえる賑やかな横丁だが、階段に足を踏み入れるとアダルトな空間へ誘われる。

かすがモール側へ通り抜けるようになると不思議なことに頭上には「たき通り」の看板。実はここ、元々別々に建った2つのビルの双方から壁をプチ抜いて開通させたという変わった成り立ちの横丁なのだ。

カラフルな看板が並び、元はコの字の通路を通して同じ裏春日側に戻ってくるだけの構造だった。現在は、「ニュー銀座街」の先は「たき通り」へとつながっている。



DS

春日ビル1番街



江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

春日あべにゅ〜側に掲げられた春日ビル1番街の看板。小さな看板の下を進むと甲府屈指の名店へと続く

春日ビル1番街は、春日通りと裏春日の間を繋ぐ横丁の内の1つで、1階に栄すしや手毬といった老舗人気店がある他、上の階にも営業している店舗がある。しかしながら、最大の特徴はその地下にあると言えるだろう。

春日ビル1番街の地下には、かつては大いに賑わった地下パー街があった。そこは今、電気も消えた暗く長い通路になっていて、階段の封鎖された東側は今や廃墟マニアが好みそうな異質の空間になっており、そこを歩くことは散策と言うより探検と言った方が正しい。明かりのある西側の階段でさえ初めて降りるのには勇気がいる。

地下パー街の西端には今も1店、老舗のバーが営業を続けている。その魅力を知りたいければ、この深淵へ足を踏み入れるしかない…。



地下パー街の東側から西を見ると速くに見える馬酔木の扉。思わず、急いであの扉へ辿り着かなければという衝動に駆られる。

DS

広瀬大通り



江戸 明治 大正 昭和 平成

中央1丁目

裏春日側に掲げられた広瀬大通りの看板は、最も古い路地横丁の風格

広瀬大通りは昭和37年に春日通りと裏春日の間を通した、最も古い路地横丁で、東側の区画は当初からの長い歴史を刻んできたが、老朽化に耐えかねて近々建て替える模様。一方西側のビルは活況で、特に1階は僅か数席ずつしかない小さな名店がズラリと連なる人気スポットになっている。

反対側は打って変わって洋風な入口。

初めて来る人に「広瀬大通り」と伝えても「Hirose Alley」は見落としがちなので注意が必要。東側の区画で開通当時から鳥料理一筋、夫婦で街の賑わいを支えてきた老舗名店「鳥真」は、惜しまれながら令和元年6月末日に57年の歴史に幕を下ろした。



DS

湯村温泉街



江戸 明治 大正 昭和 平成

湯村3丁目

大同3年(西暦808年)の約1200年前に弘法大師が開湯。信玄公のかくし湯の筆頭として知られ、葛飾北斎の「勝景奇覧 甲州湯村」にも描かれた

湯村温泉は甲府の北西に位置する温泉地。戦国武将・武田信玄の隠し湯とも呼ばれ、江戸後期には人気画家・葛飾北斎の団扇絵に“勝景奇覧 甲州湯村”として登場。さらに明治以降になると、井伏鱒二、太宰治など多数の文化人も逗留する温泉地となる。探偵小説の挿絵画家として人気を博した竹中英太郎は、居を構えたほど当地をこよなく愛した一人。また、温泉地周辺には自然豊かな景勝地が点在、峡谷「昇仙峡」はその代表格。

武将が戦の疲れを癒し、文化人が愛した美肌の湯。昭和の文豪太宰治や井伏鱒二、松本清張らの執筆の宿も多く、今でも毎分1トンにも及ぶ良質の高温泉が湧出していて、源泉かけ流しのホテル・旅館も数多く存在する。



YT

時代年表

～日本と、甲府の歴史～

西暦・元号・時代の長さ(年数)

【日本の出来事】

(1543(天文12)年) 鉄砲伝来

(1582年(天正10)年) 本能寺の変
(1590(天正18)年) 豊臣秀吉が全国統一
(1603(慶長8)年) 徳川家康が征夷大将軍となる

(1635(寛永12)年) 参勤交代が制度化される

(1685(貞享2)年) 最初の生類憐みの令を発布

(1716(享保元)年(～1745(延享2)年)) 享保の改革

(1853(嘉永6)年) 黒船来航(ペリーが浦賀に来航)

(1867(慶応3)年) 徳川慶喜が大政奉還

(1871(明治4)年) 廃藩置県
(1877(明治10)年) 西南戦争
(1889(明治22)年) 大日本帝国憲法が公布される

(1902(明治35)年) 日英同盟締結
(1904(明治37)年～1905(明治38)年) 日露戦争

(1914(大正3)年～1918(大正7)年) 第一次世界大戦

(1931(昭和6)年) 満州事変
(1941(昭和16)年～1945(昭和20)年) 太平洋戦争
(1964(昭和39)年) 東京オリンピック1964開催
(1973(昭和48)年) オイルショック

(1991(平成3)年) 湾岸戦争
バブル経済崩壊
(1993(平成5)年) Jリーグ開幕
(1995(平成7)年) 阪神淡路大震災
地下鉄サリン事件
(2001(平成13)年) アメリカ同時多発テロ
(2011(平成23)年) 東日本大震災

戦国時代	
永正	えいしょう 18
大永	たいえい 8
享禄	きょうろく 5
天文	てんぶん 24
弘治	こうじ 4
永禄	えいろく 13
元亀	げんき 4

安土桃山時代	
天正	てんしょう 20
文禄	ぶんろく 5
慶長	けいちょう 10

江戸時代	
元和	げんな 10
寛永	かんえい 21
正保	しょうほう 5
慶安	けいあん 5
承応	じょうおう 4
明暦	めいれき 4
万治	まんじ 4
寛文	かんぶん 13
延宝	えんぼう 9
天和	てんな 4
貞享	じょうきょう 5
元禄	げんろく 17
宝永	ほうえい 8
正徳	しょうとく 6
享保	きょうほう 21
元文	げんぶん 6
寛保	かんぼう 4
延享	えんきょう 5
寛延	かんえん 4
宝暦	ほうれき 14
明和	めいわ 9
安永	あんえい 10
天明	てんめい 9
寛政	かんせい 13
享和	きょうわ 4
文化	ぶんか 15
文政	ぶんせい 13
天保	てんぽう 15
弘化	こうか 5
嘉永	かえい 7
安政	あんせい 7
万延	まんえん 2
文久	ぶんきゅう 4
元治	げんじ 2
慶応	けいおう 4

明治以降	
1868～1912年	明治 めいじ 45
1900(明治33)	
1912～1926年	大正 たいしょう 14
1926～1989年	昭和 しょうわ 63
1989～2019年	平成 へいせい 30
2000(平成12)	
2019年～	令和 れいわ

【甲府の出来事】

武田信虎が躰躰ヶ崎(つつじがさき)の館をつくり甲府を開創(1519(永正16)年)
武田信虎の長男、晴信(信玄公)誕生(1521(大永元)年)

武田信玄が、信濃善光寺から本尊を移し甲府善光寺を創建(1558(永禄元)年)

甲府城完成(1600(慶長5)年頃)

甲府城の城下町形成と発展

柳沢吉保が甲府城主となる(1704(宝永元)年)

柳沢吉里が大和郡山藩に所領替え、甲府勤番支配が設けられる(1724(享保9)年)

本格的な芝居小屋「亀屋座」が西一条町(今の若松町)に開場(1805(文化2)年)

長田円右衛門が昇仙峡への道を開通させる(1843(天保14)年)

甲斐府が甲府県となる(1869(明治2)年7月)
甲府県が山梨県となる(1871(明治4)年11月)
明治天皇が県内を巡幸(1880(明治13)年6月)
甲府市として市制施行(1889(明治22)年7月1日)
甲府に電灯がともる(1900(明治33)年5月)
2度にわたり、大水害に見舞われる(1907(明治40)年・1910(明治43)年)
舞鶴城公園に恩賜林謝恩塔が建設(1922(大正11)年)
関東大震災(1923(大正12)年)
柳町通りが、県内で初めて舗装される(1930(昭和5)年)
甲府駅の新駅舎完成(1984(昭和59)年8月)
ヴァンフォーレ甲府、Jリーグ参加開始(1999(平成11)年)
甲府市と中道町、上九一色村北部地域が合併し現在の甲府市となる(2006(平成18)年)
新市庁舎、落成(2013(平成25)年)
甲府開府500年(2019(平成31・令和元)年)

Now

参考：甲府市HP、歴史まとめ.net、ウィキペディア、esireki.hikak.com